

[工芸名品展によせて]

## 日本工芸の魅力 —四つの館蔵品をめぐって—

「工芸名品展」の出陳品の中から四つの日本の工芸作品をとりあげて、日本工芸における造形と意匠の面白さ、その魅力について考えてみたいと思います。すなわち、鎌倉時代の『金銅花弁文水滴』（図1）、室町時代の『鎌倉彫牡丹文大合子』（図2）、江戸中期の野々村仁清作『色絵おしどり香合』（図3）、そして江戸中期の鍋島焼『色絵組紐文皿』（図4）の四つです。

書筆筒、硯箱、料紙入、硯、水滴、筆、紙などの文房具には、古来、造形意匠に趣向を凝らしてきました。水滴は硯につぐ水を入れておく水入れですが、昔は「すみすりかめ」「硯瓶」などともいわれました。小形なものだけに精巧を極めたものが多く、銀製や金銅製ばかりでなく、「あをじのかめ」「るりのすずりのかめ」などというように、青磁や瑠璃の水滴もありました。

この『金銅花弁文水滴』（高4.5cm、幅8.6cm）は、底面が長円形のやや大振りの水滴です。身の側面全体に山桜、梅、いばら、萩、野菊の花や枝を線刻であらわし、余地には魚々子（ななこ）をまき、鍍金をほどこし、草花文のある蓋は蝶番（ちょうつがい）で身にとめられています。これらの文様は可

図1 金銅花弁文水滴 鎌倉時代



憐ですが、釣手は平安時代のものに比べて太く、梅鉢形の釣手座、注口座もいずれも肉厚で力強さが感じられます。この水滴は口が大きく、筆を洗うための水をいれる容器である「筆洗」（ひっせん）としても使われたようです。

平安時代の工芸が唐風から脱し、和様を形成しつつ発展した時期であるとし、鎌倉時代はこの和様を完成させた時期といえます。当代の金工はそうした風潮のなかであって、武家の簡素で重厚な氣質を反映した量感ある力強い造形がみられます。

鎌倉彫は、木製の素地に様々な文様を彫刻し黒漆を塗り、更にその上に朱漆を塗った漆技法です。中国の堆朱（朱漆を何回も塗り重ね、その漆の層に文様を彫り出したもの）を学んだ技法ですが、堆朱とは、異なる感覚のものです。木のもつ温かさ、柔らかさの材質感を活かした鎌倉彫は、日本人の感性に合った漆芸といえます。

『鎌倉彫牡丹文大合子』（径24.0cm、高7.2cm）は、大振りの合子で、かつて寺院の仏殿で香をいれる容器として使われたものと考えられます。これは木製の素地に三花の牡丹文を蓋表から側面にかけて彫り込み、黒漆の中塗りの

図2 鎌倉彫牡丹文大合子 室町時代



上に朱漆が塗られています。朱漆はあざやかで、花も葉も大づかみ形で、彫り眼は深く、華やかさと動きとを巧みに表しています。大輪の牡丹の三花を円形内に整然と配する図案構成は、明時代の永楽時代の堆朱の様式を示すもので、この合子はそれを写した室町時代の作と思われます。同じ意匠の作品に南禅寺の重要文化財の鎌倉彫牡丹文大合子があります。当館の合子は、蓋を外すと丸みのある1センチに足りない丈低い黒漆塗りの合い口が現れ、豪快から一転して可憐な姿へかわるといった趣向がなされています。こういう趣向は、中国や朝鮮（高麗・季朝）の漆芸には見られない特徴です。

ところで、京都・御室焼の名匠、野々村仁清が作った『色絵おしどり香合』（高5.1cm）は、近年官製はがきのデザインに採用されて広く知られるようになった当館の日本陶磁を代表する名品です。

おしどりの雄の冬羽は殊に美しく、翼には橙色の銀杏の葉に似た思羽（おもいは）があります。仁清は、冬羽の雄のおしどりの姿を陶磁の小さな香合に見事に写しかえました。京焼特有の温かみのある土に、華麗な上絵付が施され、上品で艶やかであり、貴族的な好みを感じさせます。この香合は、京都の代表的な貴族である近衛家に伝来したもので、仁清自信の献上品のためか、これには「仁清」印は捺されておりません。近衛家熙（子楽院）は茶道にも高い見識をもった人ですが、彼の茶会など

図3 色絵おしどり香合 仁清作 江戸時代



を記録した『槐記』によりますと、子楽院は亭主として、この仁清の『色絵おしどり香合』を享保十七年（1732）十一月二十日の口切の茶会に用いています。

ところで、有田焼の窯を領内に有する肥前佐賀の鍋島藩が、將軍や諸侯へ贈答用として焼かせた特別な磁器が鍋島焼です。市販の雑器ではないので、とくに練達の工人を集めて分業制を取り、材料、技法に厳選を重ね、日本でもっとも精巧な製陶技術を示しました。

鍋島藩窯の創案になる文様には、元禄ごろの好みを反映して粋な日本的情緒を示したものが多い。とりわけ妙を得ているのが、総（ふさ）をつけた組紐（くみひも）の意匠ですが、当館の『色絵組紐文皿』（高5.8cm、口径20.2cm）はその典型的な作例です。同じ手の鍋島焼の皿がサントリー美術館に所蔵されています。口径21.0センチ位の皿は、普通「七寸皿」と呼ばれました。

この『色絵組紐文皿』は、青（染付）と赤（上絵付）の二色のみで表現しているの、色彩的には淡泊ですが、総のついた四本の組紐の配置は、決して一朝にしてできたものではなく、熟慮の上に創意されたにちががなく、緊張感を抱かせるほどよく締まっています。この交差するかたちは吉祥のしるしです。裏文様も七寸皿によく見られる牡丹文を三方に配し、高台も染付の櫛目文をめぐらせています。（林進）

図4 色絵組紐文皿 鍋島焼 江戸時代

